

黒ねこ作

— illust —

ただのサボテン

シヤドウフリート
獄天の征略者

KANTAI COLLECTION FANBOOK

艦隊Collection



KANTAI COLLECTION FANBOOK
SHADOW FLEET 3
- 獄天の征略者 -

黒ねこ作
表紙・挿絵／ただのサボテン

目次

プロローグ	【012】
第一章 北の大国	【024】
第二章 一航戦の誇り	【080】
第三章 九霄作戦	【146】
第四章 獄天の征略者	【190】
第五章 明日への戦い	【234】
エピローグ	【278】
あとがき	【286】

民間軍事会社『海神』の遊撃艦隊群。

それが、影の艦隊、である。

あらゆる理由と事情を抱えた艦娘が『海神』に雇われたとき、
彼女達は、傭兵艦娘、となり報酬のために命を賭ける。

『海神』遊撃艦隊群・第一艦隊

【加賀(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、エアカバー担当

【長門(改二)】

第一艦隊の旗艦、遊撃艦隊群の総旗艦、提督代行

【古鷹(改二)】

第一艦隊の傭兵艦娘、提督代行の秘書艦

【天龍(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、最前衛の斬り込み役

【陽炎(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、天龍の部下

【不知火(改)】

第一艦隊の傭兵艦娘、天龍の補佐

『海神』遊撃艦隊群・第二艦隊

【摩耶(改二)】

第二遊撃艦隊の旗艦、古参の傭兵艦娘

【吹雪(改)】

第二遊撃艦隊の傭兵艦娘、摩耶の補佐

【他四名】

金剛(改二)、比叡(改二)、飛龍(改二)、蒼龍(改二)

『海神』遊撃艦隊群・第三艦隊

【隼鷹(改二)】

第三遊撃艦隊の旗艦、酒好きな古参の傭兵艦娘

【鳥海(改二)】

第三遊撃艦隊の傭兵艦娘、隼鷹の補佐

【他四名】

霧島(改二)、榛名(改二)、川内(改二)、北上(改二)

『海神』遊撃艦隊群・第四艦隊

【木曾(改二)】

第四遊撃艦隊の旗艦、遊撃艦隊群の作戦参謀

【電(改)】

第四遊撃艦隊の傭兵艦娘、遊撃艦隊群の参謀補佐

【他四名】

時雨(改二)、夕立(改二)、伊 58(改)、伊 19(改)

『海神』遊撃艦隊群・第五艦隊

【利根(改二)】

第五遊撃艦隊の旗艦、左眼を眼帯で覆う傭兵艦娘

【筑摩(改二)】

第五遊撃艦隊の傭兵艦娘、利根の妹艦で補佐

【龍驤(改二)】

第五遊撃艦隊の傭兵艦娘、戦闘経験豊富な古参

【他三名】

多摩(改二)、秋津洲(改)、速吸(改)

『海神』技術開発課/資材調達課/その他

【明石(改)】

強襲揚陸潜水艦 海神、整備班の班長、技術開発課の課長

【夕張(改)】

資材調達課の課長、技術開発課の次長

【陸奥(改)】

長門の妹艦、強襲揚陸潜水艦 海神、の艦長

『海神』対外調査課

【青葉(改)】

対外調査課の課長、『海神』随一の情報通

『海神』本社/その他

【來栖 誠二 (クルス セイジ)】

民間軍事会社『海神』の社長、元帝國海軍少将

【龍田(改二)】

天龍の妹艦、『海神』社長の秘書艦

【鳳翔(改)】

居酒屋『鳳翔』の若女将、連合艦隊の元訓練教艦

【赤城(改)】

元連合艦隊の精鋭艦娘、五年前に右腕を失って引退した

大神重工業

【大神 蓮太郎 (オオガミ レンタロウ)】

大神重工業の三代目社長、生体工学の第一人者

【鹿島(改)】

大神蓮太郎の秘書艦、退役した元帝國海軍の艦娘

日本帝國海軍/參謀本部第五部

【大淀(改)】

參謀本部第五部の艦娘、『海神』を監視する特務監察艦

日本帝國海軍/連合艦隊

【大和(改)】

連合艦隊の第五代旗艦、長門の後輩

【瑞鶴(改二甲)】

連合艦隊の艦娘、新第一航空戦隊の旗艦

【翔鶴(改二甲)】

瑞鶴の姉艦、新第一航空戦隊の旗艦補佐

【葛城(改)】

瑞鶴の後輩、新第二航空戦隊の艦娘

【南雲 宗一 (ナグモ ソウイチ)】

元第一航空艦隊の提督、現在は呉鎮守府に在籍

日本帝國海軍/佐世保鎮守府

【塩澤 浩一 (シオザワ コウイチ)】

佐世保鎮守府の司令長官、帝國海軍中将

【龍鳳(改)】

帝國海軍の艦娘、塩澤の秘書艦

ソビエト共和国連邦軍/ソ連海軍

【ガングート(改二)】

ソ連海軍の艦娘、太平洋艦隊司令官の代理

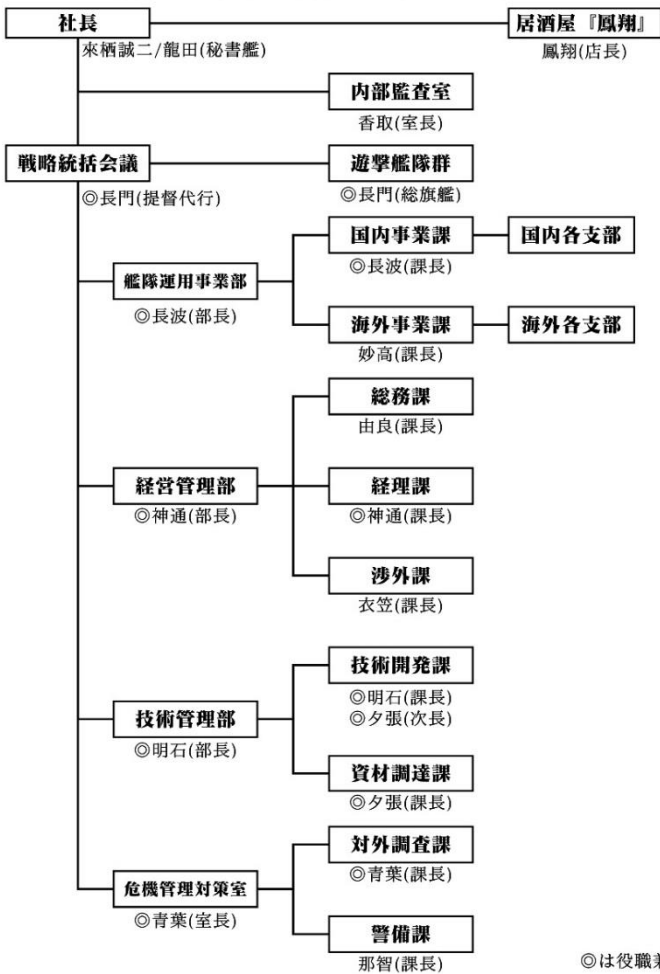
【ヴェールヌイ】

ソ連海軍の艦娘、ガングートの第一秘書艦

【タシュケント(改)】

ソ連海軍の艦娘、ガングートの第二秘書艦

民間軍事会社『海神』組織図 (2018年12月現在)



◎は役職兼務

「…………赤城さん。あなたが無事ならいいの…………先に逝って、待っているわね…………」

プロローグ

五年前、七月某日――。

ミッドウェー島の北西、一五〇哩の海原は燃えていた。

加賀は、愛用の和弓を強く握り締め、黒煙がうっすら漂う汚れた空を睨みつけながら、遙か上空で続く終わりの見えない空戦に強い焦燥感を覚えた。

「この程度で遅れを取るわけには……！」

敵機と雲群の合間で銃火を交えるのは、九機の二一型零式艦上戦闘機だ。

日の丸を標した灰白色の艦載機は、加賀の脳波と連動した「思考制御艦載機」という空母艦娘の武装である。計九機の零戦は、彼女の管制下で飛ぶ直掩機だった。

一方、カブトガニを彷彿とさせる黒の敵機は、翼端灯らしき「眼」を背面装甲の左右に付けている。ぼう、と灯った橙色が尾を曳き、灰空へ微かな軌跡を残した。

小刻みな機動を繰り返し、零戦は狛犬のごとく敵機を追いかける。20ミリ機関銃が両翼でマズルフラッシュを瞬かせるが、敵機も絶妙な旋回で幾度も銃弾をかわした。

各機の視野を脳裏で視ながら、加賀は思わず舌打ちする。

「……あまり手を煩わせないで欲しいものね」

この異様なシルエットの機体は、人類の生み出した兵器ではない。

人類へ敵対的な異種生命体——深海棲艦の中でも「空母ヲ級」などの個体を使用する「生体航空兵器」である。つまり、空母級の敵が保有する「生きた艦載機」だ。

敵は、こちらの約四倍。が、それらの大半は爆装ごと海の藻屑となり、乱戦の最中を運良く切り抜けた一部の攻撃機だけが、西に約十キロ離れた飛龍達を爆撃した。

とはいえ、命中弾は一発もない。それどころか、飛龍の直掩機に全て墜とされた。

彼女は数多の飛龍型から選ばれた最優秀の「飛龍」だ。だからこそ、帝國海軍の艦娘でも、最精銳のみが集まる「連合艦隊」で、第二航空戦隊の旗艦を任されている。

加賀が瞑想するように目を閉じた。

各機は敵を追い詰めるべく左上から向かう。敵も後背を取られまいと何度も急旋回ブレイクを行なった。双方の急旋回が連続し、飛行軌跡は振れながら交錯を繰り返す。

やがて敵機が零戦よりも前に出た。飛行速度の差を見誤ったのだ。

「——これで終わりよ」

瞬間、各機のキャノピーへ微かな影が映った。加賀の背筋が粟立つ。

「くっ！ 全機、急旋回ッ！」

直上より急降下した敵機が、機銃掃射で逃げ遅れた四機を蜂の巣に変える。

天蓋は粉々となり、超々ジュラルミンの外板が剥がれ飛ぶ。エンジンが火を噴いた。燃料タンクの引火で機体は炎上し、四機が波打つ海原に破片を散らして消えた。

加賀がギリッと奥歯を噛む。

「……馬鹿な。また、待ち伏せされたというの？」

敵空母の存在が判明してから、この不意打ちを何度も食らった。いくら高度や機動を変えても、他の機体が逆方向から必ず現われ、機銃掃射を浴びせて飛び去った。

先の残敵は北へ逃げたものの、すぐに次の攻撃隊が来るだろう。

新手が現われる前に、手を打たなければ――。

途端、加賀は激しく咽せた。口元を覆った手の平に鮮血が散る。

『……加賀さん？ 加賀さん！ 大丈夫ですかっ!?』

右耳のインカムから、飛龍の慌て声が聞こえた。……交信、切り忘れてたわね。

「……大丈夫よ。心配ないわ」

『やっぱり無茶ですよ。今からでも、加賀さんは後方に――』

「それより攻撃隊の発艦を急ぎなさい」

『で、でも！ その体じゃ……』

飛龍が心配するのも無理はない。

加賀は全身に重度の傷を負っていた。白筒袖と青い袴が特徴の戦闘服は、防弾機能と耐火性能を備えているものの、ダメージを受け続けた今はもう役に立たない。

飛行甲板も焼け爛れ、握り締めた和弓の弦はとくに切れている。

艦載機の発着艦すらできない、空母艦娘としては死したも同然の身――。

手の甲で口端を汚した血を拭う。

「私に構う余裕があるなら早く攻撃隊を――」

赤黒い染みの広がる胸元を押さえて咳き込んだ。

『お願いですから後退してください！ とつくに限界じゃないですか！』

「……黙りなさい。今、南雲機動部隊で戦える空母は……私たちがしかない。だから、赤城さんと蒼龍の分まで……私たちがやらなければ……」

『加賀さん……』

赤城と蒼龍――両名はもう戦えない。今頃、第十戦隊の軽巡・長良が率いる警戒隊の手当てを受けながら、連合艦隊の主隊へ最終的な判断を仰いでいる頃だろう。

それゆえ、南雲機動部隊に残された戦力はあまり多くない。

一方、敵は空母級を含む群体を二つ要している。挙句、ミッドウェー島の北西で確認された群体には、人類が未だ詳細を掴めていない空母級の「X個体」がいた。

交戦開始から約六時間余り。誰の目にも一大海戦の勝敗は明らかとなりつつある。

——それがなに？ 勝負の行く末が見えたから退けと言うの？

およそ一時間前、敵攻撃隊の急降下爆撃を許したとき、本当は自分が沈むはずだった。四発目の爆弾が飛行甲板を直撃し、加賀は頭上へ落ちる五発目に最期を悟った。

しかし、五発目を受けたのは赤城だった。彼女が眼前で爆発の水柱へ飲まれた瞬間、我が身に起きた状況を理解した。——加賀は突き飛ばされ、赤城あなたに守られた。

「ここで引き下がったら……赤城さんに顔向けできないわ」

無論、この戦力差で劣勢を覆せるとは思わない。だが、深海棲艦の「最上位個体」と目されるX個体——赤城を傷つけた敵空母にだけは一矢報いたい。

「飛龍。攻撃隊を出して……」

わずかな沈黙を経た後、飛龍は意を決した様子で命じる。

『攻撃隊、発艦準備！ 加賀さん。あとは任せてください』

「——そう。ありがとう」

ぐらりと世界が揺らぎ、そのまま水面へ膝をついた。

(……少し血を失い過ぎたようね)

飛龍が攻撃隊の準備を終えるまで、爆撃や雷撃を何回受けたのか見当もつかなかった。直掩機も上空の五機を残して墜とされた。ここで敵に狙われたら轟沈は免れない。

だが、加賀の心は安堵していた。

(飛龍なら必ずやり遂げる。なら、この身が沈んでも悔いはないわ——)

その時、第八戦隊の重巡艦娘——利根が飛龍に待ったをかけた。

『飛龍！ 新たな敵群を発見した！ 方位一七〇度、八〇浬！』

『敵の第三群が南に!?』

利根の零式水上偵察機“利根六号機”の報告では、新手との距離は約一五〇キロしか離れていない。航空機の数なら、三十分以内に攻撃圏内へ到達する近さである。

突然、利根が声を上げておののいた。

『ば、莫迦な！ こっちにも新種の空母級がおる！ さっきと別の個体じゃ!』

『……そんな。新種が二体もいるなんて……』

加賀は痛みを無視して立ち上がり、最大戦速で西を指した。激戦続きで酷使される機関部が悲鳴を上げるも、気にかける余裕はない。やや語気を強めて命じた。

「……飛龍。直掩機の発艦を優先しなさい。対空警戒を厳に」

『は、はいっ!』

二つの敵群が一挙に畳み掛けなかった理由は何か? ここに至って理解した。

例の急降下爆撃の後、加賀は反撃時間を稼ぐため、わざと突出して敵を叩き続けた。結果、三体の空母を沈めたと考えていた敵は混乱し、飛龍を見失ったのだろう。

それゆえ、わざと波状攻撃を仕掛け、飛龍の位置を絞り込んでいた。

(こちらが先に敵の攻撃隊を発見できなければ今度こそ——)

だんだん。飛龍達が見えてくる。ふと、南の空を仰いだとき、加賀は分厚い雲の中に影のようなものを認めた。目を凝らした途端、対空電探が敵機襲来を告げる。

『敵機接近ッ! 九時方向!』

(やはりもう近くまで……!)

敵編隊と思しき機影が乱層雲を抜ける。

飛龍は、九機の直掩機で先陣を切るも、二十機弱の敵を捉えるなり愕然とした。

『あの機体……いつもと違う! まさか新型っ!?!』

加賀の直掩機も同じ空域に入る。二本の角が生えた白い球状の新型には、尖った歯を持つ大きな顎口が見えた。ひび割れた左面と異なり、右面に赤い眼があった。

飛龍の零戦が一斉に襲いかかる。右上からの急降下。敵の新型は左へ急旋回しつつ、

斜めに宙返りの機動を取る。敵機が飛龍の脳裏で、フツと姿を消した。

『き、消えた!?!』

五秒後、彼女の九機は後方から機銃掃射を受けた。

『そ、そんなっ! どうやって後ろに!』

彼女の傍で踵の舵を切り、加賀は苦々しい顔つきで呻いた。

「……あの動き。そう。やってくれるわね……」

新型の機動に見覚えはある。とはいえ、飛龍にそれを教えている時間はない。

加賀の零戦も新型へ挑んだ。が、各機とも照準する間もなく、二機の敵機にピタリと食らいつかれ、左右どちらへ旋回しても、片方に必ず後ろを奪われてしまう。

やがて逃げ場を失い、機銃で翼を挽がれた零戦は、波間を漂う残骸の一つとなった。

「全機、撃墜? そんな、馬鹿な……」

海域に砲声が轟く。艦娘達の周りを至近弾が穿ち、悲鳴は凄まじい荒波へ吞まれる。加賀も衝撃波で殴り飛ばされた。海面に背中を強く打ちつけ、うっ、と息が詰まる。

キーンと耳鳴りのする頭を振って身体を起こし——水平線の光景へ絶句した。

サイドテールの白い髪を靡かせた赤眼の女が見える。

「あれが、第二のX個体……」

巨大な顎を持つ黒い怪物の上に佇み、何万もの異形達を従える。二門の巨砲が怪物の背で砲煙を燻らせ、ブレード状の飛行甲板らしき器官から、次々と攻撃機が飛んだ。

三百機は下らない大編隊。どれも先の敵機とそっくりな新型である。女は微かに嗤う。ここから聞こえるはずのない声が脳裏で響いた。

ナンドデモ、ナンドデモ……シズンデイケ……。

火の粉の舞い散る天上を睨み、加賀は乾いた唇で呟いた。

「——私たちが負けたのね」

突如、大気が轟音に鳴動した。間欠泉じみた水柱が、敵群を破壊の渦へ引きずり込む。深紅の対空砲弾が上空で炸裂し、火焰の嵐と化して敵編隊を焼き払う。

駆逐や軽巡クラスの艦娘が加賀の両脇を過ぎた。どれも艦隊番号は異なるが、片腕に巻いた白い腕章へ「連合」の二文字が記されている。加賀は呆気に取られた。

(どうして、後方にいる連合艦隊の主隊が……?)

ざあと白波を曳き、大型艦装を背負う戦艦が隣へ立つ。白い上衣に赤いミニスカートという格好で、和傘風のアンテナマストを携える艦娘——連合艦隊旗艦、大和だ。

「私を中心に輪形陣を組んでください！ 敵を牽制し、深追いはしないように！」

「大和。あなたは……」

倒れそうな身体で立ち上がり、大和に怒りを宿した瞳を向ける。

「今さら何をしに来たの？ あなたがもっと早く駆けつけければ戦況は——」

ふらつと傾いた加賀を、大和は慌てて支えた。

「救援が遅れた件は謝ります。でも、今はそれどころじゃありません」

「……そうね。まず、あの敵空母を叩いてからよ」

大和率いる主隊がいれば、あの敵とも互角に戦える。そうだ。まだ、終わりじゃない。ところが、大和は申し訳なさそうな表情で首を横へ振る。

「加賀さん。連合艦隊は当海域を撤退します。大本営の最優先命令です」

「……撤退？ 何を……言っているの？」

苦虫を噛み潰したような顔つきとなり、大和は声を潜めた。

「二時間前、フィリピン海で大規模侵攻が起きました。カロリン諸島、パラオ、グアムの各守備隊が応戦していますが……制圧は時間の問題です」

「待ちなさい。フィリピン海の制海権は——」

「私たちは敵に裏を搔かれたんです。サイパン、フィリピンが落ちるのも長くはかから

ないでしょう。アメリカ海軍もウエーク島攻略から手を引きました。現在、参謀本部が日米連合による本土防衛線を協議中です。たぶん、沖ノ鳥島だと思いますが」

「なら、この作戦は……」

「……残念ながら失敗です。私たちの『払暁作戦』は完全に破綻しました」

加賀は、自身の足下が消え失せたような錯覚へ陥った。フィリピン海の大規模侵攻、ミッドウエー攻略の失敗——赤城と機動部隊の皆で築いた数多の栄光が崩れ去る。

次の瞬間、狂気へ憑かれたように「フフツ」と唇の端を歪めた。

「……私だけでも戦えます。見ていなさい」

「な、何を言ってるんですか？ 待ってください！ これは命令です！」

大和の手をはね除け、覚束ない足取りで、前へ、前へと進む。あの敵だけでも沈めなければならぬ。そうでなければ……私はあなたに何て謝ればいいの？

その時、凜とした声に呼び止められた。

「加賀さん。私たちの務めは終わりましたよ」

ビクツと全身を震わせ、加賀が戦々恐々とした表情で振り返る。右腕の失せた肩口を擽で止血した赤城は、長良に左肩を支えられ、加賀のすぐ後ろまで来ていた。

彼女の頬を濡らす涙に気づき、加賀は悔しさを呑み込んだ。

「私たちの母港へ帰りましょう。ね？」

あの日、加賀はわたし灰燼を降らせる空へ誓った。

いつか雪辱を晴らすその日まで、この獄天を忘れはしない――。

第一章 北の大国

1

正午過ぎ。艦上偵察機「彩雲」が三陸沖の雲上を駆けた。

まだら雲の合間から、大海原の群青が見える。うねりの高い水面へ白い航跡波を曳き、六名の艦娘が水柱を素早くかわす。彼女達の正面では、真っ黒な群体が蠢いていた。

ザッ、と右耳へ雑音が入る。陽炎型一番艦・陽炎の明るい声が尋ねた。

『加賀さん。摩耶さん達、どうですか？』

高度四〇〇メートルを飛行しつつ、彩雲は腹に仕込まれた高性能カメラの解像度を自動調整した。約一七〇キロ離れた戦場が、加賀の脳裏で鮮明に視える。

やや下方の空中で火焰が散った。航空戦が一足先に始まったらしい。

黒い敵機を暗緑色の零戦が撃ち墜とした。正規空母・蒼龍と飛龍の直掩機——五二型零式艦上戦闘機だ。零戦の最終型とも呼べる同機は、機動力へ優れた機体である。

高雄型三番艦・摩耶に率いられ、他の者達は砲雷撃戦へ突入する。

深海魚のような怪物に斉射を叩き込む。駆逐イ級や軽巡ホ級を中心とした前衛集団が吹き飛び、大小の肉片は高々と宙へ放られる。青い血煙が荒れ狂う戦場へ漂った。

「この分なら出番はなさそうよ」

『あっちゃ。お留守番確定かあー……』

偵察映像から意識を引き上げ、加賀が潮風へ流される髪を押さえた。

西暦二〇一八年、人類は“艦娘”を用いて深海棲艦と泥沼の絶滅戦争をしている。

艦娘は、各国海軍の次世代人型兵器として知られ、日本の艦娘は日本帝國海軍に所属することが基本となる。だが、帝國海軍と一線を画すイレギュラーな者達がいた。

民間軍事会社『海神』に籍を置く“傭兵艦娘”だ。

あらゆる理由や事情を抱えた艦娘が『海神』へ雇われた時、彼女達はリスクと報酬を秤にかけて戦う傭兵艦娘となる。故に、人類の敵に対する評価は金になるか否かだ。

——傭兵艦娘に大義や正義はない。一度の仕事で得られる報酬が全てである。

『ねえ、ぬいぬい。何か面白い話ない？』

陽炎の妹艦、不知火は露骨な溜息で応えた。

『なあに、不知火？ 一発芸がよかったの？』

『……姉さん。仕事をしてください』

『はいはい。もお、ホントに真面目よね〜』

かれこれ四時間、毎時十三ノット（時速二十四キロ）で航行する鈍足の大型タンカー“ルードネフ号”を護衛しつつ、加賀達はサハリンから横須賀へ向かっていた。

海上護衛の依頼は一年を通じて需要の尽きない仕事だ。

深海棲艦が足の遅い船舶を狙うのは常識であり、例え領海の内側であっても護衛無し
の航行は自殺行為と言える。だからこそ、大金を叩いて輸送船の護衛を頼むのだ。

陽炎は退屈さを滲ませた声でぼやいた。

『あくあ、貧乏くじ引いちやったわね〜。こっちはイ級の一匹も見えないし……』

『今日は楽な仕事ですから。固定報酬で十分でしょう』

『……不知火、あんたねえ。私たちは戦果報酬を稼いでなんぼでしょ？』

『まあ、それはそうですが……』

どんな仕事でも大事なものは戦果報酬だ。敵の艦種や等級に応じて支払われる戦果報酬は収入を底上げできる。故に、彼女達は戦果を稼ぐために危険な戦いを敢えて選ぶ。

傭兵艦娘は、皆それぞれに目的がある。故に、戦っている理由も個々で違う。

加賀は独り物思いに耽った。

「……二ヶ月ぶりの帰港ね。赤城さんは元気にしているかしら？」

かつて肩を並べた親友は、五年前の戦いで右腕と数多の栄光を失った。弓を引けなくなった彼女は退役し、鎌倉市の自宅で隠遁生活めいた静かな日々を送っている。

(赤城さん……あなたが幸せならいいの。私はそのために戦っているのだから——)
昔、どこかの艦娘が耳あたりの良い理由を言っていた。

人類を脅かす“深海棲艦”を倒し、平和な海を一日でも早く取り戻すため。

それも答えの一つだ。第二次世界大戦の真つ只中、突如現われて圧倒的な物量で侵攻を始めた怪物は、約八十年も世界の海洋を支配して人類に様々な被害をもたらした。

(私は赤城さんに救われた。けれど、赤城さんの未来を奪ってしまった……)

——赤城への償い。加賀が戦いに身命を賭する理由はそれだけであった。

視界に〈敵反応感知〉の文字が踊り、意識は現実へ引き戻される。彩雲を旋回させ、撮影角度を変えると、敵味方識別装置の信号や敵の個体情報が更新されてゆく。

人間と九割は同じ肉体の艦娘は、軍事機器を内包した“人造人間”だ。

例えば、角膜表面の涙で構築した薄膜はナノディスプレイとなり、脊椎から腰椎にかけて疑似神経接続部があるおかげで、艦娘は衣類を挟んでも艀装を装備可能だった。

加えて、戦術演算装置“フェアリーユニット”を脳に埋め込んでいる。戦闘管制AI

“妖精”が艤装接続を確認すると、艦娘の戦闘を多角的に補佐する優れものだ。

ちなみに“妖精”は使用者をデフォルメ化した姿をしている。加賀の左肩にも瓜二つの妖精が座っており、彩雲の収集した情報の分析作業を肩代わりしていた。

カメラ映像の中央に赤枠が示される。波間を割り裂き、青い海へ墨汁を溢したように敵群の黒色が広がりました。加賀がインカムの交信先を切り替える。

「摩耶。あなた達の後ろに新手よ」

『げっ！ マジかよ……』

「空母三、重巡二、軽巡と駆逐を合わせて百五十体。空母ヲ級、軽空母ヌ級はどれもフラグシップ完全個体……重巡ネ級は優性個体よ。旗艦はヲ級のようね」

『チッ。あたしらは陽動に釣られちゃったわけか』

深海棲艦の基本戦術は物量戦だ。数十から数万の個体群を作り、簡単な陣形を組んで侵攻する。百五十体は、小規模な群体であり、脅威度はそれほど高くない。

しかし、赤眼の優性個体や黄眼の完全個体が、複数体いるとなれば話は大きく変わる。どちらも発達した上位個体であり、群体を統率する高い知能を備えているからだ。

今回のパターンは陽動である。わざと一部の群体を発見させ、護衛戦力を沖合へ誘導

して引き離す。そして、守りの手薄となった“ルードネフ号”を本命が仕留める。

空母級や戦艦級の完全個体は、こうした群体を使い分ける厄介な戦術を使う。

もつとも、姫級や鬼級と呼ばれる“最上位個体”とは比較にならない。どちらも一体で数千から数万の敵群を率いており、より手の込んだ戦術を用いる傾向があった。

「陽炎、不知火。タンカーを退避させなさい」

二人が『了解!』『わかりました』とタンカーの左右に分かれ、ブリッジへ退避方向を示した。こちらと新手の距離は八〇キロほど。約十分で敵機が南西より襲来する。

摩耶が砲声に掻き消されないようになった。

『吹雪! あのドンガメが安全圏に入るまでの時間は!』

『じゅ、十分ですつ! あと十分で横須賀支部の艦隊と合流します!』

『……ギリギリを狙って来やがったな。そっちで対処できそうか?』

「愚問ね」

後ろ腰の矢筒から矢を抜き、加賀が愛用の和弓へつがえた。弓懸を着けた右手で矢柄と弦を掴み、矢が右頬の辺りへ触れる位置まで、ゆっくりと弦を引き切る。

やや横風が吹いているものの、発艦に支障はない。水平線よりも少し上を見据えた。

「——鎧袖一触よ。心配ないわ」

白色の矢羽がヒュッと風を切る。発動機の排煙を吹き流し、三機の零戦が鍍を離れて大空へ飛ぶ。日の丸を灰白色の胴体や主翼へ標した機体——二一型零式艦上戦闘機だ。

不知火を連れ、陽炎が引き返して来た。

「加賀さん！ 横須賀の艦隊もう来てましたよ？」

「あちらも状況を把握していたようです。私たちが引き継ぎはしておきました」

「……そう。なら、心置きなく戦えそうね」

三度射って直掩機を増やし、矢筒から矢羽が暗緑色の矢を抜いた。

「第一次攻撃隊、発艦始め！」

まず「九七式艦上攻撃機」が放たれる。五二型零戦のように、暗緑色の塗装を施した機体で「九七艦攻」と略す。九七艦攻は「九一式航空魚雷」を装備した雷撃機だ。

次に「九九式艦上爆撃機」が発艦した。

丸っこい固定脚と白い塗装の爆撃機は、通称「九九艦爆」と呼ばれる。ある軽空母に「足が可愛い」と評された九九艦爆だが、腹に抱いた「二五〇キロ爆弾」は凶悪だ。

二種類を三機一組で十八機飛ばし、六機の直掩機を攻撃隊の護衛に回した。攻撃隊は機首を上向け、高度三〇〇〇メートルまで上昇する。そして、北西へ針路を取った。

陽炎が小首を傾げた。

「……敵の反対側に飛ばしちゃうの?」

「これも作戦よ。見ていなさい」

空母艦娘の戦いは八割が頭脳戦だ。戦況を常に把握し、敵の規模や位置を考えつつ、兵装や投入戦力を考える。故に、的確な情報把握と決断力の素早さが重要だった。

では、残り二割は何か? それは、制空権を巡って争う空中格闘戦である。

高度四〇〇メートル、次は残した六機の直掩機で迎撃戦を行なう。

加賀が瞑想するように瞼を下ろす。意識がぐっと引張られるような感覚——脳裏に

鮮やかな蒼穹が流れ込む。零戦六機と脳波の同調状況を確認——問題なし。

各機の視野、四角い赤枠——目標指示枠が、パッと前方の左下へ現われる。

一つ、二つ、三つと枠が増える。艦爆十五機、艦攻三十機、護衛九機——どれも翼端

灯が橙色の黒い機体。翼端灯は個体の強さで色が違う。橙色は、完全個体の証だった。

「各機、迎撃開始——」

零戦は敵の頭上へ猛禽のごとく襲いかかる。20ミリ機銃が密集する敵を片っ端から掃射した。爆炎が連続で咲き、うろこ雲から火の粉を散らした破片が降り注ぐ。

辛うじて逃げ切れた攻撃機も、すぐさま後ろを取られて墜とされる。腹に“荷物”を

抱えた攻撃機は動きが鈍い。機動性へ秀でた戦闘機にとっては格好の標的だ。

無論、敵もやられてばかりではない。護衛機が反撃に転じた。

先制攻撃で奇襲されたとはいえ、六対九と数は勝っている。ただし、空戦は数のみで決まるものではない。零戦は急旋回で追撃を振り切り、敵機の後背へ狙いを付ける。

すると野放しの敵三機が、一号機、五号機、六号機の後方に迫った。

このまま前の敵機を追えば撃たれる。しかし、左右のどちらへ旋回しようとも高度差を武器に食らいつかれてしまう。撃墜は免れない。だが、加賀は読み切っていた。

「良い判断ね。けれど、詰めが甘いわ」

追撃を受ける三機は宙返りの機動を取り、敵機も追いかける。宙返りする頂上直前で三機は、ぐいっと左下に機首を向けた。敵機の上方を流れるように滑って後ろを奪う。

陽炎が驚き声を上げた。

「おおっ!? ぬいぬい! 今の!」

「宙返り寸前で横滑りしたようですね。そして斜めに旋回した……なのでしょうね?」

「よく見ているのね。あれは〈捻り込み〉よ」

熟練の空母艦娘のみが扱える空中格闘戦の技——それが〈捻り込み〉だ。

各機の照準がピタッと重なる。7・7ミリ機銃が機首で火を噴いた。黒色のボディを

機銃弾が粉碎し、青黒い飛沫を散らした敵機は生々しい肉片を撒いて墜ちる。

あとは一対一の戦いだ、格闘戦に持ち込まれ、敵の護衛は役目を果たせず散った。攻撃隊の九割と護衛機を失い、運良く生き延びた二機の敵は南西へ引き返す。

妖精が「攻撃二分前」と表示する。同調を切り替え、加賀は妖精へ訊いた。

「……妨害はない？　そう。予定通りね」

彩雲の発信する座標を指し、攻撃隊は敵群へ迫っていた。

「あなたの疑問に答えるわ。陽炎」

「攻撃隊を北西に飛ばした理由ですよね？」

「ええ。まず、こちらに来る敵部隊を避けることが一つ。もう一つは——」

攻撃隊の視野、ポツポツと海上に黒い点が見え始める。

「——敵群の側面から奇襲を仕掛けるためよ」

九七艦攻は急激に高度を下げながら加速する。

キノコのような笠を被った頭と黒杖を持つ人型の空母級——空母ヲ級は左を見るなり黄眼を睜った。子飼いの怪物達へ左回頭を示すがもう遅い。

加賀の冷徹な命令が下る。

「雷撃隊。魚雷投下、始め」

敵群の対空砲が発砲炎を瞬かせ、青白い銃火線が宙を走った。九七艦攻は這うように接近し、九一航空式魚雷を落とす。十八本の魚雷は、放射状に雷跡を残して駆ける。

間欠泉のごとく水柱が噴いた。青黒い血肉が白波の合間で漂う。

しかし、ヲ級を含む上位個体は無傷である。イ級やホ級が身を挺して壁となり、魚雷を引き受けたのだ。敵空母の直掩機が迎撃へ入るも、零戦に攪乱されて近づけない。

ちなみに、深海棲艦は上位個体であるほど感情があるという。ヲ級は眉をひそめた。どうも腑に落ちない。そう言いたげな顔で空を見上げ、表情を凍りつかせた。

「各機、急降下。突撃開始——」

高度六〇〇メートル、九九艦爆の編隊が太陽を背に下る。白い槍と化した爆撃隊は一直線に上位個体へ突っ込む。降下角六〇度、一列の突撃隊形は一分も乱れない。

ヲ級が回避運動を命じると、各機の爆弾投下は同時であった。

ドンツ！ 大気を爆発の衝撃波が震わせた。又級二体の体が爆裂する。六発の爆弾が歯肉を持った甲羅風の頭部をぶち抜き、爆轟波で灰色の手足を千切り飛ばした。

又級の被弾は、二体のネ級に悲劇をもたらす。どちらも又級の護衛で傍にいたのだらう。おかげで爆発時の破片と衝撃をまともに食らい、四肢へ深い裂傷を受けた。

二体とも這って逃げようとしたが、又級の誘爆に巻き込まれて息絶えた。

ところが、ヲ級はしぶとかった。

六発の直撃コースを寸前でかわし、至近弾で身を切られながらも生き延びた。これに攻撃は終わった。そう確信していた怪物は、頭上を覆った機影に戦慄する。

「――第二部隊、突撃。止めを刺しなさい」

爆撃隊の機数は十八機。だが、始めの突撃で降下したのは十二機のみだ。

六機の九九艦爆が下った。高度五〇〇メートルで爆弾を切り離し、緩やかなカーブを描きつつ、極低空へ侵入して離脱する。黄眼を見開き、空母ヲ級は終わりを視た。

巨大な水柱が天を衝く。白い荒波に揉まれ、数多の骸は仄暗い水底へ沈んでいった。各機に帰還を命じ、摩耶へ通信を入れる。

「敵空母を排除。やりました」

『サンキュー、助かったぜ。こっちも終わりだ』

「……そう。合流は？」

『そこで待ってな。もう到着するってよ』

と、通信が切れる。すると、およそ六キロ東の海原が大きく震えた。

濃い影がうねりの下から現われ、巨大な潜水艦は波飛沫を散らして浮上する。

全長は二三〇メートル、全幅は五〇メートルぐらいだろう。ライトグレーの耐圧殻で

船体を覆った潜水艦は、シロナガスクジラの体長を優に十倍も凌駕する巨体である。

民間軍事会社『海神』の保有する最大戦力——強襲揚陸潜水艦『海神』わだつみだ。

傭兵艦娘に帰る鎮守府はない。どんな依頼も報酬次第で請負い、あらゆる海域に出没しながらも仕事を終えたら影のごとく姿を消す。故に、彼女達を知る者はこう呼ぶ。

——影の艦隊。最強にして唯一の傭兵艦隊である。

『海神』の艦長を務める長門型二番艦、陸奥の声が通信へ乗った。

『浮上完了よ。みんな揃ってるかしら?』

「第二艦隊がまだよ」

『影の艦隊』こと『海神』遊撃艦隊群は、複数の艦隊で編成された戦闘専門の部署だ。摩耶の指揮下で戦っていた五名の傭兵艦娘は皆、第二遊撃艦隊の所属だった。

『……あらあら。ちょっと浮上が早すぎたわね』

「私も着艦作業が残っているから。こちらで上空監視をしておきます」

『あら、悪いわね。ありがと』

左腕を前へ突きだし、飛行甲板を水平に保つ。艦載機の着艦と収容は、発艦作業より遙かに手間と時間がかかる。そのうえ、着艦作業中は回避運動もままならない。

ただ、陽炎と不知火は心得たもので、すでに対潜を主とする見張りを始めている。

九七艦攻を順に着艦させつつ、加賀は陸奥へ話を振った。

「長門代行は？ まだ、サハリンにいるの？」

『そ。私は、貴女達の回収があるから先に戻って来たのよ。帰りは、あちらが社用機で横須賀に送り届けるらしいわ。そうね……遅くとも夕方には帰って来るかしら？』

長門型戦艦一番艦・長門。加賀の上司であり、陸奥が大切に想う姉艦だ。

彼女は『海神』遊撃艦隊群の全権を任され、同艦隊群を指揮統率する立場にあるため、社長から「提督代行」と「総旗艦」という二つの肩書きを与えられていた。

なお、加賀と陽炎姉妹は、彼女の直轄である第一遊撃艦隊へ所属している。

ちなみに「社長代行」と呼ばれない理由は、社長が横須賀鎮守府で「提督」を務めた元帝國海軍少将であるからだ。長門は海軍時代から社長の秘書艦をしていたという。

社内では有名な噂話だが、加賀は当人の口から経緯を聞いていた。

『……きつと、モスクワ商船との話が長引いているのね。長門、大丈夫かしら？』

ルードネフ号の護衛を依頼したのは、「モスクワ商船会社」というモスクワに本社を置く貿易商社である。『海神』は、三ヶ月前から同社と取引を重ねてきた。

現在、長門は同社のサハリン支社を訪ねている。大口取引を任せたいと打診を受け、細部を詰めるために足を運んだのだ。とはいえ、単身で行かせたわけではない。

「古鷹が付いています。あの子は優秀ですから」

『あら。貴女が素直に誰かを褒めるなんて。少し驚きだわ』

第一遊撃艦隊の古鷹型重巡、古鷹は提督代行の秘書艦だ。長門の職務全般を補佐し、戦闘時は護衛の役割も担っている。当然、今回の商談にも随行していた。

『ところで、天龍は？ あの子は違うの？』

「……護衛としては優秀です。荒さは目立ちませんが」

『ふーん？ 一応、実力は認めてるのね』

天龍は、第一遊撃艦隊の「突撃隊長」と言うべき軽巡である。陽炎達の上司であり、不知火が補佐を務めていた。今回、彼女は純粋な護衛として同行していた。

キュツと車輪を鳴らし、彩雲の着艦フックが制動ワイヤーに引っ掛かって停止した。発動機を止め、加賀は目視で状態を確かめる。これで残りは上空の直掩機だけだ。

陸奥が声に憂いを滲ませた。

『でも、今度の取引。あまり無茶な依頼でなきゃいいけど……』

「多少の無茶は仕事の内です。気にしても仕方がないわ」

『……あなた、相変わらず達観してるわね』

その場で振り返り、加賀は北風に冷たさに目を眇めた。

「今は、長門代行の帰りを待ちましょう。いずれわかるわ」

第二章 一航戦の誇り

1

西暦二〇一三年、七月四日――。

現地時間、午前七時。艦娘達が輪形陣で侵攻していた。ミッドウェー島から北北西に一五〇浬（二八〇キロ）離れた洋上で、二一型零戦は曇天をバックに飛行する。

赤城、加賀、蒼龍、飛龍を陣形中央へ配置し、軽巡・長良が指揮する「第十戦隊」は彼女達に加えて、利根型重巡の利根、筑摩、金剛型戦艦の榛名、霧島を護衛していた。

全員、連合艦隊の第一航空艦隊――通称「南雲機動部隊」所属の艦娘達である。

そもそも、南雲機動部隊と呼ばれる理由は何か？

どんな艦隊でも命令を出すのは「提督」と呼ばれる人間だ。旗艦の艦娘は戦闘指揮を執るのみで、指揮官たる提督は作戦全体に関わる判断を下す立場にある。

当時、第一航空艦隊の提督は「南雲宗一なぐもそういち」という六十代の帝國海軍中将だった。だから、彼の名字を取って「南雲機動部隊」と呼ばれるのだ。

連合艦隊司令部の幕僚でもある彼は、部下の艦娘を孫娘のように可愛がる人物として知られており、赤城や加賀を始めとした艦娘達からも深く慕われていた。

だが、水雷戦隊の元指揮官であるため、航空戦に些か疎いという欠点もあった。

もっとも、彼と赤城達が挙げた戦果は多大だ。近年、日本帝國が近海の安全を確保し、南洋へ進出できるようになったのは、南雲機動部隊の功績と言っても過言ではない。

だからこそ、第三次反攻作戦でも「ミッドウエー攻略」という大役を任されている。

直掩機の視界を切り替えつつ、加賀は赤城と攻撃隊の報告待っていた。

「……遅いわね。ミッドウエー攻撃隊からの信号はまだ届かないの？」

「まあまあ、加賀さん。落ち着いて待ちましょう」

ミッドウエー島に攻撃隊を送り込んだのは三時間ほど前だった。艦戦、艦攻、艦爆を各三十六機ずつ、計一〇八機の大編隊を送り、同島の敵群を一度で排除する作戦だ。

この攻撃隊の管制は、飛龍と蒼龍に分担させ、二人の思考制御で行われていた。

加賀達の後方、飛龍がハツとした様子で声を張る。

「旗艦、赤城に報告！ 第一次攻撃は不十分。急ぎ、第二次攻撃の要を認めます！」

加賀の表情が曇る。この作戦は「奇襲」が前提だ。故に、ミッドウエー島の沖合まで

無線封止で接近し、対地兵装へ転換した攻撃隊を夜明け前に出撃させた。

(……奇襲は成功したはず。けれど、それなら攻撃が失敗した原因はなに?)

「わかりました。各空母、第二次攻撃隊の編制と準備を——」

直後、対空電探が反応を示す。利根の警告が通信に乗った。

『敵機来襲ッ！ 対空戦闘の用意をせい！』

利根と妹艦(いもうと)の筑摩は、南雲機動部隊の「眼」だ。彼女達は哨戒と偵察を担っており、海軍で「零偵」と略される「零式水上偵察機」を用いた索敵を行っていた。

「加賀さん！ 直掩機を！」

「わかっています！」

のんびり考えている暇はない。南東の空、黒点がポツポツと浮かび、だんだん敵機の独特なシルエットが大きく見え始める。敵は十機、護衛機無しの攻撃機部隊だった。

二人がフツと小馬鹿にした様子で嗤う。

「どうやら、敵は航空戦の基本を知らないようですね。加賀さん」

「これなら鎧袖一触です」

護衛機のいない攻撃隊は的ではない。鴨が葱と鍋を背負って来るようなものだ。

二人が同数の直掩機を差し向けた。零戦は自慢の機動性を発揮し、わずか十秒で三機

を撃墜し、七機の後背を奪って追い詰める。とはいえ、敵の攻撃機も必死だ。

機銃弾で蜂の巣にされながらも突貫し、腹下へ抱えた爆弾や魚雷を放って墜ちる。赤城の命令が飛んだ。

「各艦、各個に回避ッ！」

ざあと白波を曳き、半円を描くような回避運動を取った。航空魚雷は獲物を見失って逃走し、敵の爆弾は見当違いな場所で水柱を立てる。ところが、火達磨となりながら、赤城の背後から突つ込む敵機がいた。彼女の艦装を機銃弾が擦って傷つける。

加賀がキツと尻尻を吊り上げた。——赤城さんに手出しはさせません。

零戦一機を急降下させ、7・7ミリ機銃の一撃を叩き込む。肉片を爆裂させ、青黒い飛沫を吹き、敵機は海面で碎け散った。残りの敵も容赦なく撃ち墜とす。

敵機と入れ替わりで、攻撃隊が帰って来た。上空を旋回し、着艦準備を待っている。火の粉と破片を払い落とし、赤城の傍へ近づいた。

「赤城さん。怪我は？」

「この通り無事です。大丈夫ですよ」

加賀が胸中で安堵する。

まぐれ当たりだったのだろう。戦場では珍しい話ではない。

「確かに、攻撃が足りないようね。敵襲の頻度が増すばかりです」

「……困りましたね。第一次攻撃隊の收容と第二次攻撃隊の発艦……どちらを優先するべきなのか。一度、南雲提督に指示を仰ぎましょう。ん？ あら？」

右耳のインカムを押さえ、赤城は怪訝な顔つきとなる。

「長距離無電が雑音だらけで……どうも調子が悪いですね。あの敵機に中継器をやられたのかしら？ いえいえ、加賀さん。大丈夫です。短距離は普通に使えますよ」

「……そう。なら、いいけれど」

敵機は致命傷こそ与えなかったが、ラッキーパンチをお見舞いしたらしい。

大規模な作戦中、提督は後方に指揮艦を置き、旗艦と長距離無電で作戦指揮を執る。

南雲の指揮艦は、大和型戦艦の大和へ率いられた主力艦隊と共に待機していた。

長距離無電の使用を断念し、赤城は旗艦判断を下すことに決めた。

「帰還した攻撃隊の着艦を優先してください。攻撃隊を收容後、第二次攻撃隊の編成と準備にかかります。九九艦爆は、八〇〇キロ対地爆弾を搭載するように！」

飛龍、蒼龍から『了解！』と即座に応答が来る。加賀も領いて着艦準備に入った。

ミッドウェー攻略の要は、南雲機動部隊にかかっている。だが、敵の抵抗を排除した島を制圧するのは、重巡・愛宕を旗艦とした連合艦隊第二艦隊の役目である。

南雲機動部隊が手間取れば、第二艦隊の攻略作戦に遅れが出てしまう。戦場において時間は貴重だ。兵は神速を尊ぶ。無電の故障で機を逃すなど連合艦隊では許されない。

赤城は艦載機の誘導をしつつ確信していた。

(提督も同じ判断を下したでしょう。AL作戦で敵空母群はいませんし、第一次攻撃でダメなら二度目を送り込む。南雲機動部隊私が負けるはずありません)

ミッドウエー攻略作戦の裏では、アリユーション攻略作戦が動いている。帝國海軍は前者を「MI作戦」、後者を「AL作戦」と呼び、二方面で艦隊を展開中だった。

このAL作戦は、敵空母群を北方へ誘引することだ。特に、ハワイ諸島は深海棲艦の一大拠点であり、アメリカ海軍の報告では、多数の空母級が存在するとされていた。

そこで、海軍参謀本部はアリユーション方面で大規模作戦を展開するように擬装し、ハワイ諸島やミッドウエー島の周辺から、敵空母群を引き離そうと考えた。

つまり、目的は陽動だ。しかし、海軍参謀本部は「どうせだ、アリユーション方面も取ってしまえ」と、攻撃目標のダッチハーバーを片手間で制圧する腹つもりだった。

だが、これらの作戦に反対した一人の幕僚が、日記へ憂いを書いている。

『彼らは慢心している。今回も圧勝だと何の根拠もなく確信しているのだから』

この幕僚の名を「永乃修ながのおさむ」という。後に、海軍参謀総長となる男であった。

その頃、加賀の胸中では疑念が渦巻いていた。

(……敵が島を空母化しているのは確かでしょう。けれど、空爆開始から断続的な敵襲が続いているのは妙ね。……AL作戦。本当に成功しているのかしら?)

AL作戦が失敗したら、島の爆撃どころではない。敵空母を一刻も早く見つけ出し、こちらが先手を打って叩かなければ、ミッドウェー攻略作戦そのものが失敗する。

一分ほど逡巡した末、加賀は赤城へ耳打ちした。

「赤城さん。敵空母の存在を考慮した方がいいわ」

「敵空母ですか？ 心配ありませんよ」

「けれど……」

「AL作戦が着実に進んでいるんですから。大丈夫、杞憂ですよ」

「……わかりました。赤城さんを信じます」

赤城に宥められ、加賀は腑に落ちないものを感じながらも頷いた。

どのみち最終的な判断は旗艦が決める。彼女が「問題ない」と判断したら、自分達はその言葉を信じるのみだ。第一、これまで赤城が判断を誤った例は一度もない。

利根が『赤城よ!』と報告を上げた。

『四号機が敵群らしき影を捉えたぞ! ミッドウェー島の方位七〇度、二四〇浬!』

二人の顔に動揺が走った。利根の零偵「利根四号」が、ミッドウエーから見て北東、約四五〇キロに敵群を捉えたというのだ。赤城は眉根を寄せた。

「……敵艦隊が北方に向かっていない？ 艦種知らせ！ 大至急！」

『敵機襲来です！ 敵十六機が北東から来ます！』

筑摩の声が敵襲を伝える。着艦誘導を取り消し、加賀が飛龍達へ命じた。

「飛龍、蒼龍！ そちらで迎撃しなさい！」

二航戦の直掩機が一斉に向かう。今度は護衛を伴ってきたのか、零戦と敵機の制空権争いが始まった。だが、零戦に格闘戦へ持ち込まれ、次々と墜とされてゆく。

敵攻撃機の爆撃をかわしつつ、赤城は声色に苛立ちを滲ませた。

「大至急と言ったでしょう！ 艦種の特定はまだですか！」

『わ、わかっておる！ あと少しじゃ！』

旗艦の命令は絶対だ。利根が程なくして要求に応えた。

『視えたぞ。重巡、軽巡、駆逐級を合わせて約五千と推定！ ん？ なんじゃコイツ……ば、莫迦なっ!? 敵群に空母がおる！ 新種の空母級じゃッ！』

「新種の空母級？ まさか、ハワイのX個体……！」

——X個体。後に、人類が「姫級」や「鬼級」と定義する最上位個体だ。

当時、これらの個体は観測例が極めて少なかった。

アメリカ海軍と空軍がオアフ島の強行偵察を繰り返した時期もあったが、帰還できた例は一度もない。数少ない衛星写真だけが、X個体の存在を証明する手がかりだ。

帝國海軍も存在は掴んでいたが、本格的な研究や対策を進めるに足る情報が圧倒的に不足していた。故に、どうも新種の敵がいるらしい、という程度の認識しかなかった。

敵襲を退け、飛龍が二人の側へ来た。加賀は眉間に皺を作る。

「赤城さん。第一次攻撃隊の奇襲で、こちらの位置は気づかれていますよ。もしも、第二次攻撃隊を送っている間に攻撃されたら……ひとたまりもないわ」

「……そうですね。帰還した攻撃隊の収容も終わっていませんし、第二次攻撃隊を対艦装備に転換しようにも間に合うかどうか……」

「旗艦、赤城に意見具申！ 今は第二次攻撃隊を優先すべきです！ 九九艦爆の爆装が対地仕様でも、私たちならやれます。むしろ後手に回る方が問題ですよ！」

やや焦れている飛龍を睨み、加賀が強い口調で否定した。

「ここで百機近い機体を失うわけにはいきません。だいたい、護衛を付けない攻撃隊は的になるだけよ。直掩機の補給も必要です。赤城さん、今は収容を優先してください」

「加賀さん！ それじゃ間に合いませんよ！」

赤城の額から汗が伝う。南雲提督から指示は仰げない。だが、敵空母の脅威は刻々と迫っている。加賀と飛龍、どちらの意見も正しい。それでも選べるのは片方だけだ。

一度深呼吸してから、赤城は決然とした表情で命じた。

「――攻撃隊の收容を優先します。第二次攻撃隊を対艦装備に転換してください」

「赤城さん。本当にそれでいいのね？」

「……幸い、敵群は一つだけです。ここは確実性を取りましょう」

「わかりました。飛龍。聞こえたわね？」

物言いたげな表情で頷き、飛龍が着艦作業のために離れて行った。

攻撃隊の收容は急ピッチで進む。だが、艦載機に給油を施し、対地爆弾を対艦装備へ交換する兵装転換は、着艦作業ほどスムーズに終わるわけではない。

赤城は手を動かしながら謝った。

「ごめんなさい。加賀さんの意見をきちんと思えるべきでした」

「赤城さん。あの段階では誰も予想できなかったわ」

北方誘引の失敗、空母級X個体の出現――加賀も現実になるとは思っていなかった。

「ここから巻き返せばいいわ。例え、新種が相手でも鎧袖一触です」

「ふふっ、そうですね。私たちは勝ちます。きつと――」

霧島が「敵機襲来！」と告げ、二十機弱の敵機が近づいて来る。赤城と蒼龍が十機の直掩機を差し向けて空戦を開始した。すでに何度目かわからない格闘戦だ。零戦が敵の後ろに食らいつき、ぐいぐいと追い詰める。途端、複数の零戦が機銃弾を浴びた。

蒼龍が驚きに声を上げる。

『えっ!? なに、今の!?』

彼女が驚くのも無理はない。あと一步で撃墜という間際、いきなり対角から別の敵機が現われ、機銃掃射をしながら飛び去ったのだ。無論、まぐれ当たりなどではない。

赤城が巧みに機動を変えて仕掛けるも、やはり寸前で別の機に墜とされる。敵は囨と攻撃に分かれているのか、囨役の旋回した逆方向から、攻撃役が襲いかかった。

敵味方の飛行軌跡が、メビウスの帯のごとく捻れ、交わった瞬間に勝敗が決する。

一対一の格闘戦が基本の零戦を嘲笑うかのような新戦法であった。

赤城が予想外の苦戦に歯噛みした。

「……追い詰めているのに！ どうして墜とせないの！」

薄暗い空を黒煙が濁し、超々ジュラルミンの破片と灰燼が舞う。二人の直掩機は善戦しているものの、残念ながら優勢とは言えない。現状の均衡を保つのがやっとだ。

ふと、加賀はおかしな点に気がついた。

……どれも戦闘機型？ 今度は攻撃機を連れて来なかったというの？

虫の羽音めいた音がする。まさか、と頭上を見上げ、加賀は両目を剥いた。

「敵機直上ッ！ 急降下ッ！」

「——直上？ 真上ッ!？」

分厚い雲層を抜け、敵の爆撃機が一直線に下った。

加賀達は回避しようとし動き始めるも、一斉に投下された爆弾が、重力へ引かれながら落下速度を増して迫る。一発、二発、三発と極めて至近で立て続けに爆発が起きた。

噴き出す水柱にあおられ、加賀は艤装の舵を切り損ねる。

「——っ！」

飛行甲板を咄嗟に頭上へ掲げた。瞬間、凄まじい爆発で投げ出される。自分の身体がバラバラになったのかと思うほどの衝撃。飛行甲板へ蜘蛛の巣状のヒビが走った。

ふらつきながらも立ち上がる。左腕が痺れて上がらない。だからなに？ まだ倒れるわけにいかない。赤城さんは言った。私たちは勝つ。なら、勝たなければ——。

額から流れる血が鬱陶しい。ゆっくり顔を上げて気がついた。

「あ——」

黒い楕円の凶器が降ってくる。風圧で激しく揺られつつ、無機質な殺意を伴って急速

に近づいて来た。ここまで積み上げたものが、あの爆弾一発で海の藻屑となる。

——ごめんなさい。赤城さん。

刹那、弓懸を着けた腕に突き飛ばされた。加賀の黒い瞳の中で、赤城が慈母のごとく微笑んでいる。お互いに伸ばした手は届かない。やがて背筋へ落下の痛みがきた。

両肺が締め付けられる。肉体の悲鳴を無視して上体を起こした。

一瞬の出来事だった。赤城の姿は水柱に飲み込まれ、敵の航空爆弾が海面を荒らし、白い泡の飛沫を巻き上げた。加賀は躊躇いなく爆撃の最中へ飛び込む。

「赤ぎ、けほっ……赤城さん！ 赤城さんッ！」

風切り音が鳴り、眼前に爆弾が落ちる。ドンッ！ 爆轟波に殴り飛ばされ、波飛沫と破片を浴びながら水面を転がった。それでも、震える両腕で身体を持ち上げる。

意識を焼くような激痛で息が詰まった。

「——ッ!!」

声にならない悲鳴を漏らし、両眼を落として判った。胸から腹にかけて鋭利な破片が刺さっている。胸当てごと貫いたようで、黒い断片が四つも飛び出していた。

鼓動が脈打つたび、堪え難い痛みに襲われる。弓懸を嘔み、左手で破片を掴む。

生々しい水音を感じつつ、異物を順に引き抜いた。意識が何度も飛びかける。弓懸に犬歯を突き立て、手拭いを胸当ての隙間から押し込み、強引に傷口を塞いだ。

どこを見渡しても残骸が漂っている。突然、甲高い絶叫が響いた。

ハツと振り向けば、蒼龍の身体が炎に巻かれている。助けて、と泣き叫び、海に崩れ落ちる。長良が消火を始めているが、駆逐艦達は凄絶な光景へ呆然と立ち竦んだ。

飛龍が北側で迎撃に入るも、敵機は一目散に北東へ飛び去った。

——わずか五分の襲撃だった。だが、この五分で海戦の命運は決した。

夢遊病者じみた足取りで、必死に赤城の姿を探した。

「……赤城さん。赤城さんはどこ……」

やがて、不規則なうねりに身を委ねる赤城を見た。加賀が弾かれたように駆け出し、彼女を抱き起こして凍りつく。右腕がない。血塗れの右肩から先が消えている。

赤城が弱々しい笑みを見せた。

「……あら、加賀さん。どうしました？」

「そ、そんな……赤城さんの腕が……」

「大丈夫ですよ。大した損傷じゃありません」

赤城はもう二度と弓を引けない。それは、空母艦娘としての終わりを意味する。

加賀が声を震わせた。溢れた涙が頬を伝う。

「ごめんなさい、ごめんなさい……あの時、私が判断を間違えたから。攻撃隊の收容を先になんて言ったから……私が飛龍の意見を聞いていればこんなッ……」

時間を今すぐ巻き戻したい。もし、飛龍の進言に耳を貸していたら、敵空母の攻撃を防げたかもしれない。そしたら、彼女が右腕を失うことだってなかった。

そつと頬に手が添えられた。赤城が首を横へ振る。

「……自分を責めてはダメ。私たちは勝ち続けて来ました。だから、連戦連勝を重ねる内に慢心してしまった。神風が吹いている、と勝手に思い込んでいたんです」

「けれど！ 私が、私が沈むはずだったのに！ どうして、私は……」

「……加賀さん」

加賀の呆然とした顔を見据え、赤城は毅然とした態度で告げた。

「——一航戦、加賀。あなたに旗艦権限を委譲します」

「ま、待って。赤城さん。私は——」

「MI作戦は続いています。ですが、私は役に立てる状態じゃありません」

「……………」



「加賀さんなら大丈夫ですよ。ね？」

赤城の言葉は正しい。ミッドウエー攻略は終わっていない。そのうえ、X個体の問題も残ったままだ。敵機が北東に去った以上、この攻撃もX個体の仕業に違いない。

加賀の心がどす黒い炎に燃やされる。そうだ。まだ敵はいる。なら、彼女を傷つけた報いを受けさせなければならぬ。その肉の一片に至るまで水底へ沈めてやる――。

「……一航戦、加賀。旗艦を引き継ぎます」

「加賀さん。一つ頼み事を聞いてくれますか？」

「ええ。私にできることなら」

「いざという時は、雷撃処分……してください」

「――ッ！」

雷撃処分。それは、帰還できない艦娘にかける慈悲である。

深海棲艦は骨肉を喰らう怪物だ。人間も艦娘も関係ない。それゆえ、重傷で行動不能となった者に対して、生きながら喰われる苦痛から解放する目的で味方が沈める。

「この身を敵に喰わせるくらいなら……一航戦の誇りを持って沈みたい……」

「……わかりました。けれど、私が沈むまで雷撃処分はさせません」

「ありがとうございます。加賀さん」

赤城に右肩を貸し、長良へ近づいた。消火作業は終わったものの、駆逐艦達に手当てされる蒼龍は虫の息である。彼女の手を握り、飛龍は泣きそうな顔を上げた。

「……加賀さん。蒼龍、助かりますよね？ ちゃんと帰れますよね？」

「落ち着きなさい。長良！」

「は、はいっ！」

「赤城さんと蒼龍を頼みます。できるわね？」

赤城の状態に驚きながらも、長良は状況を察して頷いた。

「こちらは任せてください」

「ありがとう」

赤城を蒼龍の隣に寝かせ、飛龍へ向き直った。

「立ちなさい。飛龍」

「……でも、蒼龍が……」

加賀が飛龍の襟首を掴む。

「——私たちのすべきことは反撃して敵を討つことよ」

声色は平静そのものだが、ただならぬ殺気を帯びている。飛龍が怯え顔で頷いた。

彼女から手を離し、利根をインカムで呼び出す。

「利根。筑摩と索敵範囲を広げなさい」

『とつくに始めておる。で、筑摩から悪い知らせじゃ……』

『……第二の敵空母群を発見しました。方位一〇度、九〇浬。空母ヲ級が複数です』

敵第二群が約一七〇キロ離れた北にいる。空母ヲ級の群体とはいえ、二方向から同時攻撃されたら分が悪い。およそ十秒、加賀は黙考した末に方針を決めた。

「敵第二群を先に叩きます。飛龍を軸に艦隊を編成しなさい。第一次攻撃隊を発艦後、北西から敵の後方へ回って攻撃隊を収容。第二次攻撃隊を必要に応じて出しなさい」

「……あの、加賀さんは？」

「陽動よ。北東のX個体を攪乱するわ」

「む、無茶ですよ！ その身体で新種と戦おうなんて！」

緑羽の矢を矢筒から抜き、飛龍へ握らせた。飛龍が息を呑む。加賀の瞳で瞋恚の炎が揺らめいている。自らの命すら焼き尽くしかねない、憎悪の焰ほむらであった。

「……か、加賀さん！ あのー！」

「頼んだわよ。飛龍」

加賀は和弓を手に踵を返す。すでに覚悟は決まっていた。

「——赤城さん。あなたのために務めを果たします」

本編へと続く

『よろづ屋本舗』
明暗異色のライトノベル販売サークル

KANTAI COLLECTION FANBOOK
SHADOW FLEET 3
- 獄天の征略者 -

黒ねこ作
表紙・挿絵／ただのサボテン

C95 コミックマーケットで頒布予定！！

『よろづ屋本舗』のホームページで詳細等はお確かめください！

『よろづ屋本舗』



<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

本やサンプルの感想、ご意見等も歓迎です！
ホームページや著者の Twitter 等に送っていただければ幸いです！

サークル代表：黒ねこ作 (@gretelproject)

KANTAI COLLECTION FANBOOK
SHADOW FLEET 3
- 獄天の征略者 -

発行者：よろづ屋本舗

HP：<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

Eメール：yoroduyahonpo@gmail.com

著者：黒ねこ作 (@gretelproject)

Twitter：<https://twitter.com/gretelproject>

イラスト：ただのサボテン (@yue0313)

装丁デザイン：舩木渡 (舩木同人ワークス)

編集：黒ねこ作 (@gretelproject)

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。